

メキシコ紋章《鷺・サボテン・蛇》

二 村 久 則 川 田 玲 子

《はじめに》

今日、メキシコ国旗の中央には、蛇をくわえた鷺が湖の真ん中で石から生えたサボテンの上にとまっている姿〔図－1〕が描かれており、これが現在の国章である⁽¹⁾。この原型とされる紋章図像（以下「メキシコ紋章」という）に関してはいくつかの見方がある。即ち、先スペイン時代のメシーカ（アステカ）神話中の「ウイチロポチトリの予言」⁽²⁾が描かれたもので、先住民文化を伝承しているとする説、これに対して、この予言を含むテノチティラン（現メキシコ市の先スペイン時代の名称）創設神話が創られたのは征服以後のことであり、16～17世紀のスペイン文化の影響を受けているという見方もある。その他に先住民文化とスペイン文化の双方の影響を受けているという指摘もある⁽³⁾。

本稿では、ウイチロポチトリの予言がかつてどのように語られていたかを確認し、次いで主に植民地時代の図像史料を分析しながら、「メキシコ紋章」がどのような過程を経て形成されてきたか、「鷺・サボテン・蛇」の三要素に焦点を当てて、その変遷を辿る。さらにこの紋章に関する現代の専門家の見解と史料に残された記述を考察し、今後の展望を述べていきたい。

ここで、本稿で触れるメキシコの紋章について簡単に説明しておく。

まず「メキシコ国章」は、鷺・サボテン・蛇が主要構成要素である。19世紀初めの独立時に条例で定められた国の紋章で、その後幾度かの修正を重ねながら今日の図柄になった。

「メキシコ市章」は、1523年にスペイン国王カルロス一世（神聖ローマ皇帝カルロス五世）がメキシコ市に贈った紋章である。スペインの城とライオンが中心に描かれており、デザインに変化が見られた時期もあったようだが、今日でも市章であり続けている。

また、「メキシコ紋章」は、公式な紋章ではなかったが、植民地時代に多岐にわたり用いられた。既に記したように、国章の原型と言われている。

Ⅰ ウイチロポチトリの予言

メシーカの中心都市であったテノチティランの創設神話は以下のような内容で知られている。

「太陽神ウイチロポチトリを守護神として崇めるメシーカはある日、ウイチロポチトリとともに約束の繁栄の地を求めて旅に出た。その途中でウイチロポチトリは妹で妖術の神であるマリナルショチトルの反逆にあい、妹とその仲間を罰するという事件が起きる。その後も旅は続き、ちょうどテスコ湖畔のチャプルテペックに辿りついたとき、マリナルショチトルの息子コピルが母親の復讐戦を挑んできた。ウイチロポチトリは戦いに勝ち、コピルの頭部を山の頂きに、心臓は湖に投げ捨てた。それから39年後の1324年に、メシーカの指導者は太陽神ウイチロポチトリが予言した約束の地を示す鷺の姿を見つけた。それはコピルの心臓が捨てられた場所であった」⁽⁴⁾。

この予言の場所に町が築かれ、テノチティトランとなった。では、「メキシコ紋章」と関係すると言われる「予言された約束の地」は史料でどのように描かれているのだろうか。

まず、テノチティトランの象徴と言われている先スペイン時代の石のモニュメント『テオカリ』⁽⁵⁾を紹介しておく。これは1507年に行なわれた「新しい火の祭り（52年毎に行なわれた）」の記念碑である。全面にレリーフが彫られ、背面のレリーフに、水面に横たわった人像が描かれており、口からはサボテンが生え、その上には大きな鷺がとまり、くちばしには「戦いの象徴」と言われる彫像（glifo）が見える〔図－2〕。これには蛇は描かれていない。

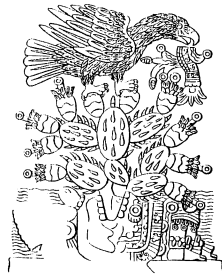
次に16世紀中葉から16世紀後半に書かれたコディセ（絵文書）はどうであろうか。メシーカの歴史が書かれた史料として最初に挙げられるのがコディセであるが、スペイン人到来以前に書かれたコディセは残っておらず、現存のコディセは征服後のものであるとされる⁽⁶⁾。

最初に、1540年頃に描かれたと言われる『コディセ・メンドーサ』では、テノチティトランと記された、石から生えたサボテンの上に鷺がとまっている図像が見られるが、この鷺は何もくわえていない〔図－3〕。同じく16世紀中葉の『コディセ・リオス』にもテノチティトラン創設の様子が描かれているが、この図では湖の中央に石から生えたサボテンが描かれ、その他に人間や魚や蛙などが描かれている〔図－4〕。やはり16世紀中葉に描かれたとされる『コディセ・オスーナ』では「1556年から1560年のフロリダ遠征隊の行進」の場面で、先頭に立つスペイン人隊長の掲げる旗に、石から生えているサボテンの上にとまった鷺の図が見られる〔図－5〕。ここに描かれている鷺は何もくわえていない⁽⁷⁾。1565年から1580年の作品とされる『コディセ・ドゥラン』にいたっては、湖の中央の石から生えているサボテンの上にとまった大きな鷺が、小さい鳥を足で押さえてついばんでいる姿もあれば、蛇をくわえている姿もある〔図－6、図－7〕。因みに同コディセにあるテノチティトランの表象には、サボテンだけのものもある⁽⁸⁾。さらに1576年に描かれた『コディセ・アウビン』のテノチティトラン創設図では、石のよ

メキシコ紋章《鷲・サボテン・蛇》



図ー1 1966年にデザインされた
国章
García Macías, 1995, p.12.



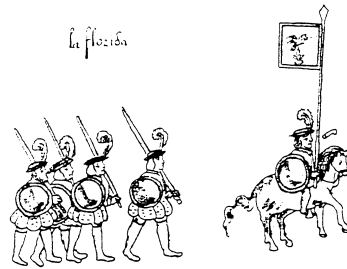
図ー2 テノチティトランで発見された
現在のところ最古とされる先ス
ペイン時代のサボテンと鷲のレ
リーフ
Tibón, 1975, p.628.



図ー3 1540年頃の『コディセ・メ
ンドーサ』
Heyden, 1998, p.54.



図ー4 16世紀中葉の
『コディセ・リオス』
Ortiz Mena, 1964, p.225.



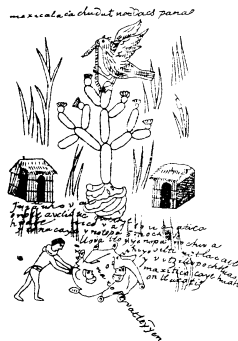
図ー5 16世紀中葉の『コディセ・オ
スーナ』の一場面。先頭の兵
士の旗に紋章がある。
Florescano, 1998, p.39.



図ー6 1565年から1580年に
描かれたとされる
『コディセ・ドゥラ
ン』
Durán, 1967 (1867-80), v.2, Lámina 63,
s/p.



図ー7 1565年から1580年に描かれたと
される『コディセ・ドゥラン』
Durán, 1967 (1867-80), v.2,
Lámina 6, s/p.



図ー8 1576年に描かれた
『コディセ・アウビン』
Peñafiel, 1980, p.51.

うな固まりから生えているサボテンの上に蛇をくわえた鷺がとまっている〔図－8〕。興味深いのは、同コディセに書かれた説明文には「その場所では鷺がサボテンの上にとまっている。鷺は翼の下にある巣を覆っている」とあり、図像と説明文に相違が見られることである⁽⁹⁾。

16世紀後半から17世紀前半に書かれたクロニカ（年代記）を調べると、例えば、F. セルバンテス・デ・サラサルが1575年に死ぬまで書きつづけたといわれる『ヌエバ・エスパーニャ年代記』には、ウイチロポトリの予言の記述は見られない。この著者は、1559年にメキシコ大聖堂に設けられたカルロス一世の葬儀の祭壇をスペイン風の双頭の鷺の紋章図像で装飾するなど、スペインのシンボリズムをヌエバ・エスパーニャへもたらした人物である⁽¹⁰⁾。

1580年代に執筆されたD. ドウランの『ヌエバ・エスパーニャのインディアス史』に記されたテノチティトラン発見の物語では、予言された場所は、鷺が爪で一羽の美しい鳥をつかんでいる情景が見られる所であった、と記されている⁽¹¹⁾。この著者は前述の『コディセ・ドウラン』の編者である。

さらに1590年に出版されたJ. アコスタの『新大陸自然文化史』では、次のように語られている。「湖の中で石から生えているサボテンを探すがよい。そのサボテンの上で大変美しい鷺が美しい鳥を食べていたら、そこが都を築く場所である。その都は世界を支配するであろう」⁽¹²⁾。また1615年に出版されたJ. トルケマダの『インディアス王国』では、「メキシコ市〔テノチティトラン〕の始まりは、石とその石から生えているサボテン、さらにその上に鷺がとまっている場所…」と記されており、アコスタの作品と同様に蛇については何も言及されていない⁽¹³⁾。

ところが17世紀前半に書かれたチマルパインの『チャルコ・アメカメカ物語』では、「サボテンの上にとまった鷺が、鎌首をもたげシャーッと音をたてる蛇を爪でしっかりとつかむ姿を目にする機会を待つがよい」と記されており、鷺とサボテン以外に蛇が登場している⁽¹⁴⁾。

その他、「鷺が鳴き、翼を広げている場所、魚が泳いでいる場所、蛇が喰い散らかされている場所…こうして彼らは、たくさんの鳥の頭や足や骨が散在している場所を見つけた」というような記述があるが、これは1998年出版の『メキシコ。シンボルの起源』でD. ハイデンが引用した文である⁽¹⁵⁾。ただし、残念ながら著者はその出典を明らかにしていない。

表－1は本章で扱っているテオカリ及びコディセを比較したものである。それぞれの図像の構成要素を鷺、サボテン、鷺がくわえているもの（蛇または他の動物や象徴）、水、石、その他に分類し、描かれているものに○印をつけた。この表から鷺・サボテン・石・水は殆どの図像で主要構成要素として描かれていることがわかる。他には、蛇

〔表－１〕

	図番	鷺 (向き)	サボテン*1	鷺がくわえているもの			水	石	他	備 考
				戦いの象徴	蛇	鳥、他				
先スペイン時代のモニユメント（テオカリ）	2	○ 右	○	○			○		人間	
1540年 『コディセ・メンドーサ』	3	○ 右	○*2				○	○		
16C中葉 『コディセ・リオス』	4		○				○	○		
1560年以降（推定） 『コディセ・オスーナ』	5	○ 右	○					○		
1565－1580年（推定） 『コディセ・ドゥラン』	6	○ 右	○			○ 鳥	○	○		
1565－1580年（推定） 『コディセ・ドゥラン』	7	○ 右	○		○		○	○	湖に鳥や蛙（？）	
1576年 『コディセ・アウビン』	8	○ 左	○		○		○	△ 石又は巢		

*1 クロニカではウチワサボテンと記されている。

*2 サボテンの一種でパストレ（paxtle: ナワトル語）に似ている。

が二カ所、戦いの象徴と鳥が一カ所ずつ描かれている。

同様に本章で紹介したいいくつかのクロニカを比較すると、主要構成要素は鷺とサボテンで、蛇・鳥・魚といったそれ以外のものは常に記されているわけではない。

すなわち、構成要素としてほぼ確定していたと思われるのは鷺とサボテンだけであり、またウイチロボチトリの予言神話の内容は一樣ではなかったと考えられる⁽¹⁶⁾。

II 植民地時代の紋章画像

植民地時代の最初期の紋章として挙げられるのは、カルロス一世が1523年にメキシコ市に贈ったものである⁽¹⁷⁾。先にも述べたように、この市章ではスペインの紋章によく見られるライオン・城・湖が主要構成要素とされ、その周囲にサボテンの葉が10枚並べられている〔図－9〕⁽¹⁸⁾。またヌエバ・エスパーニャで建造された最初のフランシスコ会の教会堂の中庭の角に立てられた石碑には、鷺が球体の上に乗っているレリーフが見られる〔図－10〕⁽¹⁹⁾。これは、テオカリに刻まれたレリーフと似ているが、多少異なる。共通点としては、鷺がモチーフとなっており、くちばしの下には「戦いの象徴」が描かれている。相違点は、前者では鷺がサボテンの上に、後者では球体の上にとまっていることである。球体はヨーロッパ世界あるいはキリスト教世界の象徴とも考えられる⁽²⁰⁾。他にも16世紀中葉から後半にかけてメキシコ市周辺の村に建てられた修道会の教会堂の土台、あるいは礼拝堂の壁に、鷺を中心モチーフとしたレリーフが見つかる〔図－11、図－12〕。

1604年にB. バルブエナが書いた詩の一節に「今日、紋章として旗に描かれている鷺とサボテンの起源」とあり⁽²¹⁾、これは当時既にこのような図が旗に使われていたことを



図-9 1523年にカルロス一世がコルテスに贈ったメキシコ市章
Florescano, 1998, p.49.



図-10 聖フランシスコ会がヌエバ・エスパニーヤで最初に建てた教会堂の石碑に彫られたレリーフ。
1570年代の作品
Carrera Stampa, 1994, p.101.



図-11 16世紀に建てられた教会堂の土台に彫られたレリーフ
Florescano, 1998, p.45.



図-12 16世紀に建てられた教会堂に彫られたレリーフ
Florescano, 1998, p.47.



図-13 1630年にスペインで作成された契約書の表紙。右側の女性の側の盾に鷲とサボテンの図像が見える。
Cuadriello, 1994, p.93.



図-14 1637年の『メキシコ市創設の地の物語』の表紙
Gómez Tepexicuapan y González-Hermosillo, 1997, p.14.

示している。これが先述の『コディセ・オスーナ』の旗を指すのかどうかは明らかではないが、ここでもやはり蛇については触れられていない。

次に1630年にスペインで作成されたエンコミエンダ関係の書類の表紙を飾る版画には、ヌエバ・エスパーニャの象徴として「石（島）から生えているサボテンの上にとまっている鷺」が描かれ、ペルーの象徴としては「二匹の蛇が立ち上がっている図像」が描かれている。これは二つの副王領を容易に識別するためであろう。ただし、この版画でも鷺は何もくわえていない〔図-13〕。

1637年に出版された『メキシコ市創設の地の物語』の表紙にメキシコ市章が描かれているが、これは1523年にカルロス一世が贈った市章とは異なる。ここではサボテンに被われた城を二頭のライオンが囲み、サボテンの上には王冠を被った鷺がとり、その鷺は蛇をくわえているのである。これは後述する17世紀中葉の同市の市章と類似する〔図-14〕。

1642年8月のメキシコ市参事会議事録に興味深い記述が見られる。同年ヌエバ・エスパーニャの副王に選ばれたプエブラの大司教パラフォックスは、就任早々、市参事会に書簡を送り、鷺とサボテンと蛇の図像がメキシコ市章のひとつとして多岐にわたり用いられているようだが、これは先スペイン時代に悪魔が異教徒に与えたものであり、キリスト教の聖母像に変更するように依頼した、と記されている。また、数日後の市参事会で図像の変更が決議された旨も記録として残っている⁽²²⁾。議事録にみられるこれらの記述は、鷺とサボテンと蛇の図像がメキシコ市章として使われていたことを示している。

1648年に、当時もっとも優れた説教家として評判の高かったM. サンチェスがグアダルルーペの聖母に関する書物を出版したが、そこでは、グアダルルーペの聖母は「鷺女 (La mujer águila)」と呼び讃えられ、クリオージョの守護者とされた。このことから、クリオージョの間で鷺が目されていたことは明らかであろう。ここでは、後世に見られるようなグアダルルーペの聖母とメキシコ紋章を組み合わせた図像はまだ示されていない⁽²³⁾が、この時代に、サボテンの実の上にとまった鷺の図像が存在し、それが「メキシコ紋章」と考えられていたことは記されている⁽²⁴⁾。しかしここでも蛇についての記述は見られない。

ところが1652年刊行のセルナ神父の説教集には、「蛇をくわえた鷺がサボテンの上にとまっている」版画が添えられている。これは、日本26聖人の一人である聖フェリーペ・デ・ヘススを讃える説教集の挿入図で、現在のところ、聖母や聖人などのキリスト教的図像に「鷺・サボテン・蛇」が添えられた最初期のものとして挙げられる〔図-15〕。しかしこの時期には蛇はまだ図像の確定的な構成要素ではなかったようで、8年後の1660年のオルティスの学士論文の表紙では、湖の中央でサボテンの上にとまっている鷺は蛇をくわえていないし、石も見当たらない〔図-16〕。



図-15 1652年の説教集に挿入された版画。下部左側に蛇をくわえた鷲とサポテンが見える。
Serna, 1652, s/p.



図-16 1660年の論文の表紙。上部中央の三つの紋章の右側の紋章に鷲とサポテンの図像が見える。
Cuadriello, 1994, p.93.



図-17 1663年のメキシコ市章
Florescano, 1998, p.51.



図-18 1687年のメキシコ市章
Dromundo, 1960, 裏表紙



図-19 1701年のメキシコ市章
Carrera Stampa, 1994, p.88.

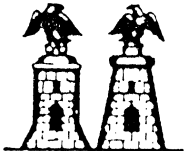


図-20 1721年のメキシコ市章
Carrera Stampa, 1994, p.88.



図-21 1724年のメキシコ市章
Carrera Stampa, 1994, p.88.



図-23 1747年のメキシコ市章
Carrera Stampa, 1994, p.88.



図-22 1729年のメキシコ市章
Carrera Stampa, 1994, p.88.

イエズス会士A. カボの記録によれば、その後1663年にメキシコ市は市章の図像に関する新条例を出している⁽²⁵⁾。カルロス一世が同市に贈った図像の中心の図柄であるスペインの城に「鷺とサボテン」を加えるように、というのである。

この新条例のもとに作られた市章のうち、先述の1637年の市章に類似するものもある。即ち、中央に描かれた城をサボテンが覆い、その上に蛇をくわえた鷺がとまっているもの〔図-17〕や、湖上の城の両横にサボテンとライオンが描かれ、城の上のサボテンにとまり蛇をくわえた鷺が見られるものなどである〔図-18〕。これに続く1700年代前半のメキシコ市章では、スペイン的な城が中心モチーフであったが、その城に添えられる動物などは定まっていなかった。1701年の市章では城の両横に冠を被ったライオンが一頭ずつ描かれているし〔図-19〕、1721年の市章では塔が二つ並び、塔の上にそれぞれ鷺が一羽とまっている〔図-20〕。1724年の市章には四角い土台の上に塔が一つ描かれ、両横にはライオンが一頭ずつ、さらに塔の上にはサボテンにとまった鷺が描かれている〔図-21〕。1729年の市章は湖上の城の両横にサボテンが生え、城の上に描かれた塔の両横にライオンがおり、上部には巨大な冠と二羽の鷺がアーチのように描かれて城全体を覆っている〔図-22〕。1747年の市章は、1724年の市章とほとんど同じ構図であるが、城は湖上に描かれている〔図-23〕。このように1700年代前半の一連のメキシコ市章には、蛇と石は全く見当たらない⁽²⁶⁾。この時期、1701年から1711年の10年間、副王アルブケルケも「湖に生えるサボテンの上にとまった鷺」を家紋の一部として使った。この紋章でも鷺は蛇をくわえていないし、石も見当たらない⁽²⁷⁾。一般に副王の家紋はスペイン風の盾形紋章で、アルブケルケの例は珍しいケースと思われる。と同時に、副王が家紋に用いたほど、当時は鷺とサボテンの紋章が流行していたとも考えられる。

1722年から1742年にかけて発刊されたメキシコの新聞『ガセータス・デ・メヒコ』の表紙には、メキシコ市章が描かれていたようである。『ガセータス・デ・メヒコ』復刻版の3巻本（1950年）に見られるいくつかの紋章には、主に「サボテンの上にとまって蛇をくわえた鷺」の図像が使われている。年代順に見ると、1728年1月、1729年1月、1730年3月、1732年1月、1733年2月、1737年1月、同年3月、1742年12月のものとなる。興味深いのは1730年3月版で、前述の1729年のメキシコ市章とほぼ同じ構図である。ライオン・城・鷺・サボテン・湖といった主要モチーフが混合状態で描かれており、ここに描かれた二羽の鷺は蛇をくわえていない〔図-25〕。その他は鷺とサボテンと蛇が構成要素になっている。ただし、サボテンは地面から生えているものと、水から生えているものとに分かれる〔図-24、図-26〕。以上のように、メキシコ市章の図柄は一つではない⁽²⁸⁾。

ところで17世紀末以降には、植民地時代に崇拝が始まったグアダルーペの聖母が描かれた聖画や聖フェリーペ・デ・ヘススの姿が彫られた宗教版画に「メキシコ紋章」が並



図-24 1728年の新聞の表紙
González de Cossío y otros,
1949, v.1, p.69.



図-25 1730年の新聞の表紙
González de Cossío y
otros, 1949, v.1, p.234.



図-26 1737年の新聞の表紙
González de Cossío y
otros, 1949, v.3, p.16.



図-27 17世紀末から18世紀初めの作品。
ミゲール・サンチェスの1648年の
説教集をもとに描かれたとされ
る。
Cuadriello, 1995, p.17.



図-28 図-27の下段中央部の拡大図
Cuadriello, 1995, p.13.

置される傾向が見られる⁽²⁹⁾。

サボテンの上にとまった鷺の図像が添えられた最初のグアダルupesの聖母の聖画として紹介できるのは、17世紀末から18世紀初めに描かれたと推測される、サンチェス神父の1648年の説教集をもとに描かれた絵である⁽³⁰⁾。中央に聖母が描かれ、周囲には五つの聖母出現図が見られる。下部中央に描かれている出現図には、聖ヨハネと聖母の間に、サボテンの上にとまっている鷺が描かれているが[図-27、図-28(図-27の一部拡大)]、この鷺は蛇をくわえていないし、水(湖)も描かれていない。

1746年の絵では、聖母の浮き上がったマントを両手で広げたファン・ディエゴが中央に描かれている。マントの両側には紋章のついた盾を手に持った二人の女性が見え、右側の王冠を被ったスペイン風の女性の盾にはライオンが一頭、左側の先住民風の女性の盾にはサボテンの上にとまって蛇をくわえた鷺が描かれている⁽³¹⁾。この他にも同様な紋章が添えられた作品が何点か残っている。

他に、サボテンにとまった鷺がグアダルupesの聖母を高々と掲げているように見える、これまでとは異なった構図も見られる⁽³²⁾。J. クアドゥリエージョによれば、この構図で描かれた最初の作品は、18世紀後半のM. ビジャビセンシオの版画である⁽³³⁾。ここでは大きく育ったサボテンの上にとまった鷺の頭上に、聖母が描かれている。鷺はくちばしに水差し(あるいは籠)をくわえ、足で蛇をつかんでいる。そして蛇は口から水を吐き出している[図-29]。

またグアダルupesの聖母がメキシコ市の守護聖母となった時の祝賀の模様を描いた1778年の作品にも、湖の中央でサボテンの上にとまり蛇をくわえた鷺の頭上に聖母が描かれている。そして鷺と聖母の間には、グアダルupesの聖母出現図が二つ横に並び、両側には先住民とスペイン人と思われる二人の人物が描かれている[図-30]。

一方、日本で殉教した聖フェリーペ・デ・ヘススに関しては、既に1652年のセルナ神父の説教集に鷺・サボテン・蛇の三つの構成要素を含む紋章が描かれていることを指摘したが、ここではその後の展開を見ていく。

1729年の版画では、中央の空間に聖フェリーペの磔刑図があり、その下には鷺のモチーフをあしらった列聖を請願する言葉が見られる⁽³⁴⁾。次に1774年の版画では、十字架に掛けられた聖フェリーペの姿とともに、メキシコ市の現在の憲法広場(ソカロ)の上空を飛ぶ鷺が描かれている⁽³⁵⁾。この二枚の版画には鷺のみが描かれているが、1781年の図像ではサボテンにとまった鷺のさらにその上に十字架に掛けられた聖フェリーペが描かれている[図-31]。これらの鷺は蛇をくわえていないようである。

1801年刊行のJ. M. モンテス・デ・オカの版画集は、1683年のB. メディーナ神父の『日本の最初の殉教者、聖フェリーペ・デ・ヘススの人生と殉教とその列福物語』を描いたものであるが、その中の二枚にはサボテンの上にとまり、蛇をくわえた鷺が見え



図-29 18世紀中葉の聖母出現図
Cuadriello, 1995, p.18.



図-30 1778年の聖母出現図
Cuadriello, 1995, p.21.



図-31 1781年の説教集に挿入された版画
Martínez de Adame, 1781, s/p.



図-32 1801年のモンテス・デ・オカの版画集の一枚
Montes de Oca, 1801, s/p.

〔表－２〕

	図番	鷺 (向き)	サボテン*	鷺がくわえているもの			水	石	城	ライオン	他	備 考
				戦いの象徴	蛇	鳥、他						
1523年 メキシコ市章	9	○	葉のみ10枚				○		○	○ 2頭		カルロス一世から贈られた
1535年 聖フランシスコ会教堂のレリーフ	10	○ 右		○							球体	
16Cに建てられた他の教堂のレリーフ	11	○ 右		○								
16Cに建てられた他の教堂のレリーフ	12	○ 左		○								
1630年 スペインで作成された契約書の表紙	13	○ 正面	○					△ 石又は島			王冠	
1637年 メキシコ市章	14	○ 右	○		○		○		○	○ 2頭		鷺とライオンが王冠を被っている
1652年 説教集の挿入図	15	○ 右	○		○							聖人に伴う
1660年 学術論文の表紙	16	○ 左	○				○					
1663年 メキシコ市章	17	○ 右	○		○				○			
1687年 メキシコ市章	18	○ 右	○		○		○		○	○ 2頭		
1700年(推定) グアダルーベの聖母出現の図	28	○ 左	○									
1701年 メキシコ市章	19								○	○ 2頭	王冠	ライオンが王冠を被っている
1721年 メキシコ市章	20	○ 左・右							○			
1724年 メキシコ市章	21	○ 不明	○						○	○ 2頭		
1728年の新聞『ガセータス・デ・メヒコ』	24	○ 左	○		○			△ 大地			王冠	
1729年 メキシコ市章	22	○ 左・右	○				○		○	○ 2頭	王冠	
1730年の新聞『ガセータス・デ・メヒコ』	25	○ 左・右	○				○		○	○ 2頭	王冠	
1737年の新聞『ガセータス・デ・メヒコ』	26	○ 左	○		○		○				王冠	
1746年 グアダルーベの聖母出現の図		○ 左	○		○							
1747年 メキシコ市章	23	○ 正面	○				○		○	○ 2頭		
18C中葉(推定) グアダルーベの聖母出現の図	29	○ 右	○		△ 足で踏む	○ 水差し	○					聖母と一体化 蛇の口から水
1778年 グアダルーベの聖母の祝いの図	30	○ 右	○		○		○					聖母と一体化
1781年 聖フェリーペ・デ・ヘスの殉教の図	31	○ 正面	○									聖人と一体化
1801年 聖フェリーペ・デ・ヘスの伝説の図	32	○ 右	○		○							聖人と一体化
1966年 現在の国章	1	○ 左	○		○		○	○			樅と月桂樹の葉	葉は独立直後に描かれ始める

* クロニカではウチワサボテンと記されている。

る。そしてそのうちの一枚では、サボテンの上にとまった鷺が高々と聖フェリーペを掲げている〔図－32〕。この構図は先述のビジャビセンシオのグアダルーベの聖母の聖画や1778年のそれと似ている。聖フェリーペの姿とともに描かれた紋章には、石や水（湖）は描かれていない。

ここで、これまで紹介した図像の構成要素を表によって整理する。表－2は、表－1で分類した構成要素に城・ライオンを付け加え、さらに備考欄に図像に関する特記事項を記したものである。

まず鷲は、1523年にカルロス一世がコルテスに贈ったメキシコ市章と1701年の同市の市章以外のすべてに描かれている。ただし、その翼の広げ方と向きは図像によって異なる。

次にサボテンは、かなりの図像に描かれているが、16世紀中葉のキリスト教関係の建物に彫られた一連のレリーフ及び1701年と1721年のメキシコ市章には見られない。

先スペイン時代のテオカリに描かれた「戦いの象徴」は16世紀中葉に使われているが、教会建築に限られているようである。それ以降「戦いの象徴」が使われた様子はなく、代わりに蛇が登場してくる。蛇は、17世紀中葉に一部の図像で見受けられるが、しかしその定着は見られず、ブルボン朝が始まった18世紀の20～30年間には殆ど姿を消している。その後、再登場して鷲とサボテンとともに主要要素となっていく⁽³⁶⁾。スペインの城やライオンは、メキシコ市章の主要構成要素として用いられている。

上述以外の構成要素では、先にも述べたが、初期の一連のコディセに描かれ、またクロニカでも言及されている石は、表－2の図像には殆ど見られない。唯一、1630年にスペインで彫られた版画に、石のようなものが描かれているだけである。またメキシコ市の地理的特徴を表すと考えられる水（湖）も、常に描かれているというわけではない。

表－2の分析の結果、次のようなことが言えよう。紋章の構成要素として、鷲とサボテンが共に描かれるようになるのは1630年以降である。蛇が最初に登場するのは1637年だが、その後直ぐには要素として定着していない。17世紀後半に「鷲とサボテン」を添えることを義務づけられたメキシコ市章では、スペイン的要素（城・ライオン）と土着の要素（鷲・サボテン・蛇）の混在が見られるが、続く18世紀では蛇は姿を消し、サボテンは不確定要素となり、スペイン的要素がより強調されていくように見える。このように、メキシコ市章に添えられた「メキシコ紋章」は構図が定まらないが、18世紀の聖画や宗教版画では、その構成要素と構図が次第に定まっていく様子が窺われ、脇役から主役と同列に位置づけされる傾向が見られる。興味深いことに、聖画におけるグアダルーペの聖母と「メキシコ紋章」の構図の変化は、聖母が1736年にメキシコ市の守護聖母に、次いで1747年にヌエバ・エスパーニャの守護聖母となり、さらには1754年にローマ教皇によってこの聖母崇拝が認められた時期とほぼ一致する。

III メキシコ紋章とその解釈

メキシコ紋章に関しては、既に指摘したように、先住民文化を受け継いでいる、スペイン文化の影響を受けている、双方の文化の影響を受けている、という三つの見解がある。

最初の先住民文化説は、現代の研究者では、A. カソ、J. コローナ＝ヌーニェス、

J. ゴンサーレス＝アングーロ、A. ロペス＝アウスティンなどがその立場をとっている。カソは「テノチティトランは征服者によって破壊され消滅したが、その場所の表象は生き残り、そしてアステカ文化の社会組織や他部族に対する支配組織はヨーロッパ文化の中に吸収されていった。ヌエバ・エスパーニャの社会構造の構築は、アステカ帝国の基盤なくしては不可能であった」⁽³⁷⁾ としている。コローナ＝ヌーニェスは、残念ながらカソのように明確な考え方は示唆していないが、「今日のメキシコ国旗の中央に描かれている紋章はテノチティトランの創設を表す」、と論文の最後を締めくくっている⁽³⁸⁾。また、ゴンサーレス＝アングーロは、ヌエバ・エスパーニャで紋章として使われていたスペイン風の双頭の鷲が、メキシコ紋章とならなかった理由を、以下のように説明している。コルテスはテノチティトランを取り壊してこれを上回る都市をその地に築けば征服者の勢いは先住民を圧倒すると考え、周囲の反対を押し切ってテノチティトランを征服地の新しい都と定めた。そのため、鷲とサボテンと蛇の図像も含めたかつてのテノチティトランの文化が新しいメキシコ市に受け継がれた⁽³⁹⁾。さらに、ロペス＝アウスティンは、メキシコ紋章の構成要素及び意味、テノチティトランの創設物語の創作年代等の曖昧さを理由に主要モチーフである鷲と蛇をスペイン文化の影響で用いられたと唱えている研究者がいるが、そのような考え方は飛躍しすぎている、と考えている⁽⁴⁰⁾。また、鷲と蛇の図像は世界各地で使われており、キリスト教世界独自のものではなく、メシーカの神話や今日までウィチョール族に伝わる鷲と蛇の伝承神話などを論拠にすれば、むしろ先スペイン時代の先住民文化を受け継いでいる、としている⁽⁴¹⁾。

第二のスペイン文化説は、ディバーガーとクアドゥリエージョによって唱えられる。上述のロペス＝アウスティンの考えとは反対に、ディバーガーは、ウィチロポチトリの予言の内容や意味の曖昧さを論拠とし、「鷲と蛇の神話やその意味が、実は先スペイン時代ではなく、植民地時代になって創作されたもので(中略)鷲と蛇の対時的解釈はヨーロッパ的なものだ」と結論付ける⁽⁴²⁾。次にクアドゥリエージョは「メキシコ紋章」がいつ頃描かれ始めたかに言及し、次のように記している。即ち、スペインでサボテンの上にとまった鷲の紋章をヌエバ・エスパーニャの象徴として用いた最初の作品は1630年の版画であり、ヌエバ・エスパーニャでは1660年の版画である⁽⁴³⁾。このように、この紋章は16～17世紀のスペインのシンボリズムの影響を受けているとする。ただし、彼は1630年の作品が実際どのような過程を経て描かれたのかについては具体的には何も触れておらず、筆者が紹介した、1652年にヌエバ・エスパーニャで彫られた版画についても何ら触れていない。

折衷説を唱えるのはフロレスカーノで、メキシコ紋章は先スペイン時代の文化の延長線上で形成されていった、とする点ではカソらと同様であるが、テノチティトラン創設の神話の起源については、メシーカがメキシコ渓谷で権力を得た後に創作されたと推測

する。さらに紋章の図像の決定権をもっていたクリオージョにも注目し、彼らが先住民文化から生まれた図像を選択したのであり、メキシコ紋章はスペイン文化が先住民文化を継承した結果である、と説明する⁽⁴⁴⁾。

以上が三つの見解の概略である。相違点として挙げられるのは、まず、メキシコ紋章とウイチロポチトリの予言の関連及び予言が語られ始めた時期であろう。

その他に興味深い点は、主要構成要素の鷲と蛇の解釈である。まず問題となるのは、第一章で述べた征服前の石のレリーフ「テオカリ」である。確かに「テオカリ」のレリーフはウイチロポチトリの予言の場所を連想させるが、これはサボテンの上にとまった鷲という構図に起因する。残念ながら、この構図に関する当時の記述は存在しない。現代の研究者は、これをウイチロポチトリの予言の場面と関連付けるのが一般的である。鷲は太陽神ウイチロポチトリの化身であり、サボテンは太陽神ウイチロポチトリとの戦いに敗れ湖に投げられたコピルの心臓から生え、その実は神に捧げる生け贄の心臓である、という解説が多い。しかし一方で、横たわっている人像の解釈としてはコピル以外の神の名がいくつか挙げられ、鷲に関しても新説が出され、近年研究者の間でもその解釈はさまざまである⁽⁴⁵⁾。このように「テオカリ」の解釈は定まっていないうし、先に触れたように、ウイチロポチトリの予言も内容が定まっていないう。

同様に鷲と蛇に関して、歴史的にどう解釈されてきたか、あるいはその図像の用途は何かを、第二章で扱った17世紀の史料から見てみよう。副王パラフォックスが1642年に土着の文化と密接な関係にある紋章の除去を提案したことは前章でも述べたが、当時のメキシコ市参事会議事録から、同副王が、鷲とサボテンと蛇の図像をメシカの偶像崇拜の象徴と理解し、キリスト教的なものとは考えていなかったことが分かる⁽⁴⁶⁾。1630年と1660年の版画に見られるように、単に場所（この場合、ヌエバ・エスパーニャ）の表象として使われた例もある。ただし、この二つの図像を当時どのように解釈していたのか、現在のところはっきりしていない。

その他にクリオージョ神父達が鷲とサボテンと蛇の図像を利用した事例もある⁽⁴⁷⁾。まず1648年の書物でグアダルーペの聖母を「鷲女」と表現したサンチェス神父は、「鷲は天空を飛ぶ鳥であり、支配者あるいはキリストの象徴で（中略）、神の化身として選ばれたが、しかし征服前のメキシコ紋章に描かれた鷲と混同される恐れがある。そこで聖母マリアの手でメキシコの鷲をキリスト教に改宗しようと、鷲の胸に十字架を贈った」と記している⁽⁴⁸⁾。同じくクリオージョ神父のセルナは1652年の説教で、「かつて〔先住民が〕偶像を崇拜し、サボテンの上にとまった鷲（悪魔）のために祭事を行っていた時代には、メキシコは過ちの名人（maestro de errores）であった。現在では敬虔なカトリックだ。（中略）サボテンの上にとまった悪魔の化身である鷲のための祭事はもう行われない。今日ではサボテンの上にとまった鷲は聖フェリーペ・デ・ヘススであり、聖フェ

リーペのための祝いを行うのだ。聖フェリーペはフランシスコ会士の中で育った鷲なのだ⁽⁴⁹⁾と語っている。セルナにとってサボテンは十字架で、サボテンにとまった鷲は十字架に掛けられた聖フェリーペであり、キリストでもあった⁽⁵⁰⁾。

以上のように、17世紀の人々の間では、鷲とサボテンあるいは蛇の図像が先住民文化の影響を受けたものとした上で、その図像の使用を拒否する立場と、逆にそれを利用しようという二通りの姿勢が見られる。ただし、利用する場合には、キリスト教的解釈で紋章の図像を説明している。

このように、メキシコ紋章の変容過程を把握するためには、図像の変遷のみならず、その解釈も重要である。その意味でも、本章で紹介した17世紀中葉のクリオージョ神父の言葉は興味深く、さらなる分析が必要であろう。

《結びに代えて》

本稿では、限られた範囲内ではあるが、ウイチロポチトリの予言の内容を検討し、さらに植民地時代の紋章図像を構図面で比較・分析し、「メキシコ紋章」に関する近代の研究者の見解と史料に残された記述について整理してきた。最後に国章の歴史を簡単に紹介し、同時に今後の展望について触れておきたい。

1821年11月2日に「国旗」とともにメキシコの「国章」が初めて法制化された⁽⁵¹⁾。この法令によれば、国章の最初の図柄では、王冠を戴く鷲が、湖上に突き出た石に生えるサボテンに左足でとまっている。まだ蛇は描かれていない⁽⁵²⁾。これは、イダルゴ神父が1810年9月16日に掲げた旗に描かれている「グアダルーペの聖母」とはまったく異なったもので、1812年8月19日にJ. M. モレーロス神父が掲げた団旗の中央に見られる、「三重橋に生えたサボテンの上で王冠を戴く鷲の図像」を参考にしていると言われる⁽⁵³⁾。イツルビデ帝政時代に最初の国章とされた王冠をかぶった鷲は、帝政崩壊後、直ちに樹立された臨時政府によって、メキシコ鷲へと姿を変えた。1823年4月14日、「左足で湖上に突き出た石に生えるサボテンにとまり、右足では蛇をつかみ、くちばしで食いちぎろうとしているメキシコ鷲の姿を国章とする」⁽⁵⁴⁾、と公布され、こうして「メキシコ紋章」は国章となったのである。

先に述べたように、ロペス＝アウスティンは、「メキシコ紋章」はウイチロポチトリの予言が描かれている、と解釈している。しかし一方で「子供の頃に、国章の鷲は気高く威厳があり、愛する祖国の善で、逆に蛇は悪であると教えられた。善である鷲が鋭いくちばしで悪である蛇をついばみ打ち負かすと説明された」とも述べている⁽⁵⁵⁾。これはキリスト教的解釈と考えられ、今日においても、国章となった「メキシコ紋章」の解釈が一つではないことを示唆している。

「メキシコ紋章」の歴史はいまだ全容が把握されておらず、これと関連の深い、メキシコ市章の歴史も十分には研究されていない。同市の紋章も含めた各市町村の紋章、公共施設、大学、スペイン系の人々の間などで使われた紋章や印を研究対象とする、より広い視野にたった図像分析が、「メキシコ紋章」の歴史を紐解く上で重要な手がかりとなろう。スペイン本国人やクリオージョのアイデンティティー、あるいはメキシコのナショナリズムの関連から、その変容を探るのも興味深いと思われる。

註

- (1) メキシコの国旗の歴史に関しては、参考文献の A.García Macías, *Bandera de México*, A. Gómez Tepexicuapan y F. González-Hermosillo, *La evolución del escudo nacional* を参照。
- (2) メシーカはメキシコ中央高原一帯にアステカ帝国を築いた部族の名で、ウイチロポトリはメシーカの守護神の名である。
- (3) これら三つの見解に関しては本稿第三章を参照。
- (4) ロペス＝アウスティンが紹介するテノチティラン創設神話を要約したものである。A. López Austin, *El conejo...*, pp.61-63.
- (5) 一般に「神の家 (Teocalli)」と呼ばれているが、正式な名称は「神の家の聖戦争 (La Sagrada Guerra de Teocalli)」である。テオカリに関しては、E. Pasztory, *Aztec Art*, pp. 165-169. を参照。
- (6) 高山智博『アステカ帝国の謎』, pp.46-47. 征服以前に描かれたコディセは殆ど残っていないとする見解が多く、描かれた時期が征服以前か以後かで意見が分かれるコディセが何点か見られる。本稿で扱うコディセは征服以後の作品である。コディセに関する詳細は *Arqueología mexicana*, の Vol.IV, núm. 23 及び Vol.VII, núm. 38 などを参照。
- (7) 本稿で扱う図像の鳥に関しては、鳥の種類がはっきりせず猛禽類には見えない場合もあるが、種類が明らかである場合を除いて鷲とした。
- (8) D. Durán, *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme*, Vol.2, Lámina 6, 63, s/p., D. Heyden, *México, orígenes de un símbolo*, p. 111.
- (9) A. Peñafiel, *Códice Aubin [Códice de 1576]*, pp.50-51.
- (10) F. Cervantes de Salazar, *México en 1554 y Tímulo imperial*, pp.173-212.
スペインのシンボリズムに関して、サンティアゴ・セバスティアンは「当時ヨーロッパでは、図像の考案が流行しており、征服後にヌエバ・エスパーニャへ到着したスペイン人のあいだでそれが流行したのは自然であろう…」と記している。S. Sebastián, *Iconografía del arte del siglo XVI en México*, p.147.
- (11) D. Durán, *op. cit.*, Vol.2, cap.V, p.48.
- (12) J. Acosta, *Historia natural y moral de las Indias*, p.329.
- (13) J. Torquemada, *Monarquía indiana*, Vol.1, p.132.
- (14) Chimalphain C., *Relaciones originales de Chalco Amecamecan*, p.55, A. López Austin, *op.cit.*, p.64 から引用。
- (15) D. Heyden, *op. cit.*, pp.54-55.
- (16) 神話や伝説の起源あるいは主要要素の変化は他のメキシコの神話や伝説などにもみられる。

たとえば、アステカ帝国の滅亡物語では、「アステカ帝国滅亡物語の『一の葦の年』とケツァルコアトルの関連に関しては、実は征服について記した初期の記録にはほとんど見つかっておらず、滅亡物語にそれらの要素が出てくるのは、だいたい1530年代半ば以降に書かれた記録である。したがって、『一の葦の年』とケツァルコアトルという具体的な日時や神の名はもともと伝承されていた神話にはなかったもので、後世のスペイン人がつくりあげた神話なのかもしれない」という指摘がある。増田義郎『物語 ラテンアメリカの歴史』、p.45-46を参照。また、聖フェリーペ・デ・ヘスス伝説に関しても、最初は「フェリーペが殉教すると、実家の庭の木が枯れた」となっていたが、後に、「枯れた木に突然緑の芽が出た」と変化している。Reiko Kawata, *Felipe de Jesús. La carrera histórica de un santo criollo*, La tesis de la maestría de la Universidad Nacional Autónoma de México を参照。さらにグアダルーペの聖母物語でも、聖母出現の日時やその関係者の名前が次第に加えられていったという指摘もある。川田玲子「メキシコの聖母グアダルーペ崇拝に関する『1556年の調査報告書』について」『名古屋短期大学研究紀要』第35号、pp.67-78を参照。

- (17) 17世紀末のベタンクルトの記述によれば、スペイン国王カルロス一世は1523年7月に、メキシコ市の申請に応え盾形紋章を正式に授与したが、その少し前に同市に対し一時的に仮の紋章を授与している。この仮の紋章の図柄は、当時異教徒が用いていた図柄を利用したもので、蛇をくわえ、水から生え出たウチワサボテンにとまった鷲と3つの塔を持つ城が描かれ、また2頭のライオンと上部が王冠で装飾されたものであった。この記述は、17世紀になって多く見られるサボテンにとまって蛇をくわえた鷲の図柄が、1523年以前に異教徒の間で用られていたことを示している。しかしこの仮の紋章に関して、ベタンクルトの記述以外に史料は見つかっておらず、詳細は明らかではない。従って、本稿では仮の紋章に言及していない。A. Vetancurt, 'Tratado de la ciudad de Mexico, y las grandezas que la ilustran despues que la fundaron Españoles, cap.2, p.5, en *Teatro mexicano*.
- (18) メキシコ市参事会議事録によれば、1527年に初めてこの図像を用いた印が作られ、盾形紋章としては翌1528年に初めて作られた。 *Acta de Cabildo*, 11 de enero de 1527, 9 de marzo de 1528.
- (19) 教会堂は1535年に建造されたが、同石碑は1570年代に建造されたもののようで、現在国立歴史博物館に所蔵されている。M. Carrera Stampa, *El escudo nacional.*, p.101-102, E. Florescano, *La bandera mexicana.*, p.43.
- (20) E. Florescano, *La bandera...*, pp.42-44.
- (21) B. Balbuena, *Grandeza mexicana*, p.25.
- (22) *Acta de Cabildo*, 14 de agosto de 1642, 18 de agosto de 1642.
- (23) 1648年のミゲル・サンチェス神父の説教集の表紙に、ウチワサボテンの上に立つ人物像で、背後には双頭の鷲が描かれている。長年、これはグアダルーペの聖母であるとされ、聖母とメシーカの神話の図像が一体化している最初の作品として紹介されてきた。しかし近年異論が唱えられ、次のように説明されている。この版画は当時カテドラルが使用していた紋印 (viñata) で、版画のモチーフとしてみられる姿は被昇天の聖母 (Nuestra Señora de Asunción) である。そして、ローマ教会を背景に、メキシコ・カトリック教会の発展や、スペイン王権の征服および支配を示すものである。F. de la Maza, *El guadalupismo mexicano*, J. Cuadriello, "Visiones en Patmos Tenochtitlan. La mujer águila", *Artes de México*, 29, p.13, "Los jeoglíficos de la Nueva España, J. Cuadriello (coord.), *Juegos de ingenio y agudeza. La pintura emblemática de la Nueva España*,

pp.105-108.

- (24) M. Sánchez, *Imagen de la Virgen Maria Madre de Dios de Guadalupe*, s/p.
- (25) A. Cavo, *Tres siglos de México*, Carrera Stampa, *op.cit.*, p.85-86 から引用。1692年にメキシコ市で起きた大火により1644年から1691年の同市参事会議事録は焼失したようで、残念ながら旧メキシコ市参事会資料館には現存していない。
- (26) これらは18世紀にメキシコ市章として使われた盾形紋章や印などである。Carrera Stampa, *op.cit.*, p.87-91.
- (27) *Loc.cit.*
- (28) 植民地時代のメキシコ市章の図柄は一定ではないが、これらはカルロス一世が1523年にメキシコ市に贈った紋章を基本パターンとしつつアレンジされたものと考えられているようである。旧メキシコ市参事会資料館、現メキシコ市資料室、国立資料館の各関係者のインタビュー及び M. Carrera Stampa, *op.cit.*, p.87-92 を参照。
- (29) ここで扱う聖像の他、カルロス二世や聖イポリトなどもシンボルとともに描かれているが、ここでは植民地時代に崇拜が起こった聖像を対象とした。
- (30) サンチェス神父の説教をもとに描かれた作品は他に2点ある。1点は、17世紀（推定）の作品で、七つの頭を持った動物が描かれている。もう1点、18世紀（推定）の作品は、聖ヨハネの足下に付き添っている驚らしい鳥の姿があるのみである。J. Cuadriello, "Visiones...", p.16.
- (31) *Ibid.*, p.20.
- (32) クアドゥリエージョによれば、現在までに見つかっている、この構図の作品は10点もない。
Loc. cit.
- (33) *Ibid.*, p.18.
- (34) M. Romero de Terreros y Vinent, 1948, p.349.
- (35) *Ibid.*, p.373.
- (36) 蛇の登場の経緯やその意味に関しては現段階では十分に研究されておらず、先スペイン時代の蛇（ケツァルコアトル神など）の存在を指摘する研究者はいるが、紋章に描かれている蛇との関連は言及されていないようである。
- (37) A. Caso, *op. cit.*, p.17.
- (38) J. Corona Nuñez, "El nopal, el águila y la serpiente" en *Universidad Veracruzana, Anuario Antropológico*, No.1, p.13.
- (39) J. González Angulo, *El criollismo y los símbolos urbanos*", p.73.
- (40) A. López Austin, "El águila...", pp.16-17.
- (41) 旧大陸の石のレリーフでは、例えば、紀元600年頃の中央アジアの蛇をくわえた双頭の鷲の図像やビザンチン様式の鷲と蛇と兎の図像などが比較対象として挙げられる。ルルカー『鷲と蛇。シンボルとしての動物』, p.25, p.103。ロペス＝アウスティンは、先スペイン時代の図像として後古典期の鷲と蛇の石のレリーフを挙げている。A. López Austin, "El águila...", pp.17-18。ウイチョール族に伝承されている蛇をくわえた鷲の絵や伝承物語に関しては、図像が描かれ始めた時期あるいは伝承の始まりなどを明らかにしておらず、論拠とするには信憑性に欠ける。A. López Austin, "El águila...", pp.18-19.
- (42) C. Duverger, *L'origine des astèques*, p.309, A. López Austin, "El águila...", p.17 から引用。
- (43) J. Cuadriello, "Los jeroglíficos...", pp.84-113, "Visiones...", pp.10-23.

- (44) E. Florescano, *La bandera...*, pp.13-34, p.22.
- (45) テオカリのレリーフの構成要素の意味については、A. Caso, "El águila y el nopal" en *Memoria de la Academia Mexicana de la Historia*, t. v, abril-junio, pp.93-104, D. Heyden, *op.cit.*, J. Corona Núñez, *op.cit.*, E. Florescano, *La bandera...*, A. López Austin, *El conejo...*, "El águila..."などを参照。研究者が異なる見解を唱えており、特にハイデンの見解は他に類を見ないので、興味深い。
- (46) *Acta de Cabildo*, 14 de agosto de 1642.
- (47) 後述の他にも解釈が把握できる作品がある。例えば、本稿第二章で紹介した18世紀後半のM. ビジャビセンシオの版画〔図-29〕である。そこに描かれた、大きく両翼を広げくちばしに水差し（籠）をくわえた鷲と、口から水を吐き出す蛇の構図が黙示録第12章14節の描写であることが、作品の中に帯状に彫られたラテン語から理解できる。つまり、この版画的な鷲と蛇はキリスト教の象徴であって、先スペイン時代の文化の象徴ではないのである。ラテン語訳に関しては専門家の助言を仰いだ。
- (48) M. Sánchez, *op.cit.*, s/p.
- (49) I. Serna, *Sermon predicado en la santa iglesia Cathedral de Mexico*, s/p.
- (50) *Loc. cit.*
- (51) A. García Macías, *op. cit.*, pp.91-92.
- (52) *Ibid.*, p. 92.
- (53) モレーロスの団旗には蛇が描かれていないが、1815年に独立軍の独立国家構想案に示された国旗の図柄では蛇が加わる。同案によれば、鷲は、湖上に生えるサボテンに正面を向いてとまり、翼を広げ、頭部のみ右向きで蛇をくわえている。A. García Macías, *op. cit.*, p.85.
- (54) *Ibid.*, pp. 94-95.
- (55) A. López Austin, *El conejo...*, pp.59-61.

参考文献

- Acosta, Joseph de
1979(1940) *Historia natural y moral de las Indias*, México, Fondo de Cultura Económica.
- Actas de Cabildo,
1523, 1527, 1528, 1642 México, Antiguo Cabildo de la Ciudad de México.
- Arqueología,
1997 Vol.IV, num.23 y 1999 Vol.VII, num.38 México, Editorial Raíces S.A.de C.V.
- Balbuena, Bernardo de
1941 *Grandeza mexicana*, México, U.N.A.M.
- Carrera Stampa, Manuel
1994 *El escudo nacional*, México, Secretaría de Gobernación.
- Caso, Alfonso
1946 "El águila y el nopal" en *Memoria de la Academia Mexicana de la Historia*, t.v, abril-junio, México, pp.93-104.
- Cervantes de Salazar, Francisco
1985 *México en 1554 y Tímulo imperial*, México, Editorial Porrúa.

- 1985 (1914) *Crónica de la Nueva España*, México, Editorial Porrúa.
- Corona Núñez, José
- 1970 "El nopal, el águila y la serpiente" en *Universidad Veracruzana, Anuario Antropológico*, No.1, Veracruz, Facultad de Filosofía y Letras. Escuela de Antropología.
- Cuadriello, Jaime
- 1994 "Los jeroglíficos de la Nueva España", Jaime Cuadriello (coord.), *Juegos de ingenio y agudeza. La pintura emblemática de la Nueva España*, México, Museo Nacional de México y otros, pp.84-113.
- 1995 "Visiones en Patmos Tenochtitlan. La mujer águila", *Artes de México*, No.29, pp.10-23.
- Dromundo, Baltazar
- 1960 *Cedulario de la metrópoli mexicana*, México, Departamento del Distrito Federal
- Duran, Diego
- 1967 (1867-80) *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*, 3 vols., México, Editorial Porrúa S. A.
- Florescano, Enrique
- 1994(1987) *Memoria mexicana*, México, Fondo de Cultura Económica.
- 1998 *La bandera mexicana. Breve historia de su formación y simbolismo*, México, Fondo de Cultura Económica.
- García Macías, Alfonso
- 1995(1985) *Bandera de México*, México, Miguel Angel Porrúa.
- Gómez Tepexicuapan, Amparo y González-Hermosillo, Francisco
- 1997 *La evolución del escudo nacional*, México, Castillo del Chapultepec, Sala de Banderas.
- González Angulo, Jorge
- 1991 "El criollismo y los símbolos urbanos", *Historias*, No.26, pp.73-81.
- González de Cossío, Francisco y otros
- 1949 *Gacetas de México*, 3 vols. México, Secretaría de Educación Pública.
- Heyden, Doris
- 1998 *México, orígenes de un símbolo*, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Kawata, Reiko
- 1990 *Felipe de Jesús. La carrera histórica de un santo criollo*, La tesis de la maestría de la Universidad Nacional Autónoma de México.
- 川田玲子
- 1996 「メキシコ『聖フェリーペ・デ・ヘスス』に関する一考察」『ラテンアメリカ研究年報』16、日本ラテンアメリカ学会、pp.60-96。
- 1997 「メキシコの聖母グアダルーベ崇拝に関する『1556年の調査報告書』について」『名古屋短期大学研究紀要』第35号、名古屋短期大学、pp.67-78。
- López Austin, Alfredo
- 1994 *El conejo en la cara de la luna*, México, Instituto Nacional Indigenista y CONACULTA.
- 1995 "El águila y la serpiente", Enrique Florescano (coord.), *Mitos mexicanos*, México, Aguilar, pp.15-20.

ルルカー、マンフレート

1996 『鷺と蛇。シンボルとしての動物』林捷訳、法政大学出版局。

Martínez de Adame, Joseph

1781 *Sermón de San Felipe de Jesús*, México, Felipe de Zúñiga y Ontiveros.

増田義郎

1998 『物語 ラテンアメリカの歴史』、中公新書。

Maza, Francisco de la,

1984(1953) *El guadalupanismo mexicano*, México, Fondo de la Cultura Económica

Montes de Oca, José María

1801 *IHS vida de San Felipe de Jesús protomártir del Japón y patrón de su patria México*, México, Calle del Bautisterio S. Catalina M. núm. 3.

Ortiz Mena, Antonio y otros

1964 *Antigüedades de México-basadas en la recopilación de Lord Kingsborough-*, México, Secretaría de Hacienda Y Crédito Público, Facsimiles.

Pasztory, Esther

1983 *Aztec Art*, New York, Harry N. Abrams, Inc., Publishers.

Peñafiel, Antonio

1980(1902) *Códice Aubin [Códice de 1576]-Manuscrito Azteca de la Biblioteca Real de Berlín, Anales en mexicano y jeroglíficos desde la salida de las tribus de Aztlan hasta la muerte de Cuauhtémoc*, México, Editorial Innovación S.A.

Romero de Terreros y Vinent, Manuel

1948 *Grabados y grabadores en la Nueva España*, México, Ediciones Arte Mexicano.

Sánchez, Miguel

1648 *Imagen de la Virgen Maria Madre de Dios de Guadalupe*, Mexico, Biuda de Bernardo Calderon.

Sebastián, Santiago y otros

1995 *Iconografía del arte del siglo XVI en México*, México, Universidad Autónoma de Zacatecas.

Serna, Iacinto de la

1652 *Sermon predicado en la santa iglesia Cathedral de Mexico*, Mexico, Biuda de Bernardo Calderon.

高山智博

1979 『アステカ帝国の謎』、講談社現代新書。

Tibón, Gutierre

1995 (1975) *Historia del nombre y de la fundación de México*, México, Fondo de Cultura Económica.

Torquemada, Juan de

1975(1615) *Monarquía indiana*, México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Vetancurt, Agustín

1971(1698) "Tratado de la ciudad de Mexico, y las grandezas que la ilustran despues que la fundaron Españoles", en *Teatro mexicano*, México, Editorial Porrúa S.A.

本稿の執筆にあたり、上智大学の小林一宏先生と愛知県立大学の野田隆先生には、お忙しい中、

貴重なお意見を頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。ただし、本文に誤りがあるとすれば、それはすべて筆者の責任である。